修士論文概要

児童英語学習者のスピーキングに対する不安抑制の研究
―3 つのタスクに焦点を置いて―

諏訪まりの（博士前期課程 2023 年 3 月修了）

2020 年度から小学校での英語が教科となったことにより、単に「英語に親しむ」だけではなく「英語によるコミュニケーションスキルの基礎を養う」ことが目的となり、授業内容が 4 技能 5 領域化した。文法事項の学習や語彙の習得数も 600～700 語程度に設定されるなど、英語学習時間と児童の学習負担も大きく増加している。

これらの英語教育の低年齢化と学習の負担増が、児童に早くから苦手意識や不安感を生じさせたり、動機減退につながったりしないような授業実践が必要であると考える。本研究ではコミュニカティブな活動が推奨される中で、最も不安を感じるとされるスピーキングに焦点を当て、提案した 3 つのタスクが不安抑制に有効であるかどうか課題を設定し、調査をする。

タスクの形態や特徴から見える長短や教師の役割を考察し、不安抑制につながる 3 つのタスクを提案するとともに、それぞれに対して以下の課題(a)～(c)を設定した。

(a) インプット型リスニングタスク: リスニングを中心とした絵本による学習が、「話す力」の土台となる「聞く力」にプラスの影響を与えるか？

(b) アウトプット型自己表現タスク: ショートスピーチの工夫が不安抑制につながるか？

(c) インプット・アウトプット相互作用型タスク: クイズタスクの工夫が、不安抑制につながるか？

課題(a)については、ALT が英語で長文を話したり日本人教師が全て英語で話したりする場合、聞き取ったり理解したりできないかもしれない不安が大きいことが分かった。しかし、絵本のレベルは自由に選択でき、難しい単語や表現が出てくることは少ないことや、活動の中では、コミュニケーションを円滑にするよう日本語を使用可能としている。よって、意味を理解できない状況はできにくく、不安になりにくいと言える。

課題(b)については、5、6 年生のアンケート・インタビュー調査結果より、英語が相手に通じるのか、みんなの前での一人の発表に高い不安を感じていることが分かった。しかし原稿を教師に添削してもらい十分な練習を行うことで、不安を感じることなくスピーチができるという回答も得たことから、教師から意識的に支援を申し出たりスピーチを聞く際のルール共有を全体に行ったりすることが、不安抑制につながると考えられる。

課題(c)については、インフォメーション・ギャップのタスクであることからゴールが明確であり、達成のために自然な発話が促されたり協力をしたりすることから、仲を深めるきっかけになり得る。さらに、自分の既知情報からクイズを出すため、苦手なことを無理して言ったり、間違いも恐れたりすることなく取り組めると考える。

本研究の大きな課題は、現場でタスクを実践できなかったことであり、実際に 3 つのタスクが不安抑制に有効なのかどうか定かではないということである。しかし、学年による英語への意識の違いや共通している不安を明らかにし、タスクによる不安抑制の可能性とコミュニケーション能力の育成の可能性、今後のタスクの在り方について考察することができた。